

チャペル週報

しかし、あなたがたはそれではいけない。
あなたがたの中でいちばん偉い人は、
いちばん若い者のようになり、
上に立つ人は、仕える者のようになりなさい。
(ルカによる福音書 22:26)



春季宗教運動特集号
2007 5.14 ~ 5.18 No.5
関西学院宗教センター

チャペル・スケジュール

時間 10:35 ~ 11:05 場所 各学部チャペル

5月14日(月) ランバスチャペルアワー

"God You" 学生によるチャペル

於：中央講堂

5月15日(火) 大学合同チャペル(西宮上ヶ原) 10:20 ~ 11:20

「和解の使者」Ruth M. Grubel (院長・宣教師)

於：中央講堂

大学合同チャペル(神戸三田) 10:20 ~ 11:20

「神戸三田キャンパスと建学の精神」松木真一(理工学部宗教主事)

於：号館201号教室

5月16日(水) 大学合同チャペル(西宮上ヶ原) 10:20 ~ 11:20

「イエス・キリストのMastery for Service」木ノ脇悦郎(神学部教授・学部長)

於：中央講堂

大学合同チャペル(神戸三田) 10:20 ~ 11:20

「和解の使者」Ruth M. Grubel (院長・宣教師)

於：理工学部チャペル

5月17日(木) 学部合同チャペル(西宮上ヶ原) 「宣教師によるEnglish Chapel」

"Facing the Truth" Richard J. Stinson (宣教師)

於：中央講堂

総 今泉信宏(宗教主事)

5月18日(金) 学部合同チャペル(西宮上ヶ原)

ビデオ「関西学院、風・光・力のあゆみ」

於：中央講堂

理 「それにもかかわらず」松木真一(宗教主事)

ランバス早天祈祷会 午前8:20~8:40

於：ランバス記念礼拝堂

5月15日(火) 春季宗教運動のために

嶋村 誠

5月16日(水) 春季宗教運動のために

永田 雄次郎

5月18日(金) 社会学部のために

高坂 健次

総合政策学部早天祈祷会 毎木曜日 午前8:40~

於：宗教主事室

大学キリスト教週間への招き

建学の精神 - 関西学院の「やる気」

打 樋 啓 史

黒澤明監督の「生きる」という映画がある。市役所に勤める主人公は、25年間の勤務の中で新しいことに挑戦することもなく無難に漫然と日々を過ごしてきた。そんな彼はある日自分が癌で余命半年と知る。絶望し荒れるが、彼はやがて気づく。残された日々の中で何かを創ること、それが自分の生きる意味であり、そこに救いがあると。以来、彼は生まれ変わったようになり、貧しい地区に公園を作るため奔走する。ついに公園が完成したある日、彼はそこにあるブランコに揺られながら、静かにしかし満ち足りた表情で息を引き取る。印象的なのが、主人公が公園建設を決意した時に「それは無理です」という部下たちに対して繰り返して語るセリフである。「いや、きっとできる。やる気さえあれば。」

春季大学キリスト教週間の主題は「関西学院建学の精神」、つまり関西学院をかけがえのないものとしてきた「関学スピリット」のことである。「精神／スピリット」の語源を聖書に辿れば、これが「風」や「息」を表す言葉であることが分かる。風も息も目には見えないが何かを動かす。風が吹けば木が揺れるし、息によって生物は生きている。同じように精神／スピリットも目には見えないが内側から人を動かす。それは内面に吹く風、人を新しい生き方へと押し出す息吹のことだ。この精神／スピリットが、「生きる」という映画では「やる気」という言葉で描かれていると言えるだろう。

118年前、ランバス宣教師は「やる気」をもって海を渡った。日本の若者にキリスト教主義に基づく本物の教育を授けたいという「やる気」、それが関西学院を創ったのだ。しかし、ここでいう「やる気」とは単なる自己実現や成功のための奮起とは異なる。「生きる」の主人公の「やる気」は、死という自分の限界を見据えて、限りある命を特に不利な立場にある他者のために用いようという決意だった。ランバス宣教師の「やる気」も、神の前で自分の限界を知り、感謝に支えられ、自らの生を他者と分かち合おうとする憧れと情熱だった。この週間、今日まで学院の歴史がそのような意味での無数の人々の「やる気」によって紡がれてきたことを心に刻みたい。そしてこの学院に連なる私たちが、それぞれの課題に向き合うための「やる気」を見出すきっかけになればと願っている。

(社会学部宗教主事)

J.C.C. Newton, Christian Statesman

Ruth M. Grubel

Although we often hear about the great Dr. W. R. Lambuth here at Kwansei Gakuin, the life of another founding member of our school, Dr. J.C.C. Newton, is also very inspirational. Not only was he a kind and skilled educator and pastor, his physical presence was so impressive that even one week before his death, at the age of 83, a person attending a large ecumenical conference saw Dr. Newton in the midst of the crowd, and asked his neighbor, “ Who is the tall, dignified man, with the face of a saint? ”

Dr. Newton could easily have spent his entire life in small-town South Carolina where he was born in 1848. He served as a soldier during the last year of the Civil War, in the Confederate army, when he was only 17 years old. This could have been an experience to sour his view of fellow Americans living in the northern states, but he became a model of intercultural understanding and the best Christian ideals.

After the war, J.C.C. Newton attended the Kentucky Military Institute, and was ordained as a minister in the Methodist Episcopal Church, South in 1874. Dr. Newton served several churches in Kentucky for ten years, and then went to Maryland, where he studied at Johns Hopkins University. There, he was a student of Professor Herbert Baxter Adams, who also taught both the famous Japanese thinker, NITOBÉ Inazo and Woodrow Wilson, later to become U.S. President. Even while engaged in graduate studies, Dr. Newton served a church in Baltimore, Maryland. It was during this time that Dr. W. R. Lambuth and his wife, Daisy, were trying to encourage young Americans to join them in mission work in Asia. Daisy Lambuth wrote to their home church, “ Are you all dead? Is that the reason you do not come to our help? ” Evidently, these words inspired Dr. Newton and his wife to consider working abroad.

One year after arriving in Japan, the Newtons moved from Tokyo to Kobe, where they joined the Lambuths and others to begin Kwansei Gakuin in 1889 with just a handful of students. Dr. Newton served as the dean of the Biblical School, a position which he held for many of the years he spent here. His deep faith and emphasis on scholarship established a firm foundation for Kwansei Gakuin and the department which would later become the School of Theology. Many of the early Methodist leaders of Japan were students of Dr. Newton.

Although poor health ? both Dr. Newton 's and his wife 's ? forced them to spend 1897 to 1904 back in the United States, they then returned to Kwansei Gakuin until 1923 when they were both 75 years old. In 1916, Dr. Newton reluctantly agreed to serve as president (incho) of Kwansei Gakuin after the long, capable leadership of Professor Yoshioka. His tenure as president was less than four years, but he worked hard to prepare for Kwansei Gakuin 's qualification as a university and to adapt to changing needs both inside and outside the school. He also supported the Canadian, Dr. C.J.L. Bates, who became his successor, and served for twenty years as president.

Throughout his career, Dr. Newton worked hard to bring understanding between his home country and his adopted country, Japan. He wrote books and articles introducing Japan to the English-speaking world. In Japan, his humility, quiet leadership, and sense of ethics were appreciated, not only by those in the Christian community, but by government officials and business leaders in Japan. Just before his death, a representative of the League of Nations visited Dr. Newton in Atlanta to ask advice on an international matter, demonstrating that his global perspective was respected very widely.

We are truly blessed to have such a committed Christian and supporter of cross-cultural reconciliation among our early leaders. I pray that we may follow Dr. Newton 's leadership and continue the work for mutual understanding that he began.

(院長・宣教師)

「イエス・キリストのMastery for Service」

木ノ脇 悦 郎

皆さんは、入学式以来関西学院のスクールモットーであるMastery for Serviceという言葉をくり返し聞きながら過していることと思います。入学式のシーズンは、キリスト教の暦ではイエス・キリストが十字架にかかった受難週から、復活という出来事を想起するイースターにかけての時期と重なってきます。

Mastery for Service即ち「奉仕のための練達」をその源流にまでさかのぼっていきますと、実はこのイエス・キリストの受難と復活ということに出会うのです。「奉仕」とは、自分だけのためではなく他者のために働き仕えることだといえます。そして、よく仕えるために私達は自分に与えられた賜物、能力を更によいものへと高め「練達」していくというのです。イエスという人物は、あのローマの支配下にあったユダヤ社会という閉塞的な状況の中で、人々の希望となりました。その希望とは、人間が人間として生きるための人間性回復の希望であったと言ってもよいかと思います。当時の人々が人間として生きるために、イエスはその生命をかけて人々に仕えたのでしょう。その結果が権力を持つ者達による残酷な十字架刑であったのです。そこまで徹底的に「奉仕」に生きたこととなります。

しかし、その奉仕のための死はそれで終わりませんでした。その死の後に「キリスト」（救い主）として人々の中に生き続けることになったことは御存知のとおりです。それは、彼の人の死後2000年経った今も、世界中の人々に励ましと慰めを与え、多くの人々に困難な中で希望を与え続けているということです。今日の時代の中で、私達がこの希望を受け継ぎ、次の世代の人々にもそれを伝えていくことこそMastery for Serviceの根源的な意味ではないかと思うのです。M・ルターは『キリスト者の自由』という小著で「キリスト者は、すべての者に仕える完全な下僕である」と同時に「キリスト者は何ものにも隷属しない自由な主人である」というテーゼを示し、これは矛盾しないと言います。私達も自らの自由な行為としてmastery for Serviceの人になりたいものです。

（神学部教授・学部長）

新緑の美しい季節に - 変わるもの変わらないもの

松 木 真 一

新緑の美しい季節になりました。一か月前に入学した頃は、まだ桜の季節でした。徐々に変わり始めています。今、どのような思いで毎日を過ごしているのでしょうか。期待通りの学校に入学できた、と満足しているのでしょうか。大学生活の楽しさを実感しているのでしょうか。それとも、予想外に戸惑い、期待や希望とは裏腹の何か不安な日々を過ごしているのでしょうか。上ヶ原・神戸三田両キャンパスに入学した多くの学生たちが各々今、こうしたそれぞれの様ざまな思いを胸にとにかくスタートしたところです。

季節が初夏から夏、秋へと変わっていくにつれ、時の変化と共に周りの状況も自分の生活も徐々に変化していくことでしょう。友人関係もクラブ、サークル、また大学での勉強や活動もどんどん変化し、何よりも自分自身が成長しつつ、今までに経験しなかったような変化を実感していくのでは、と思います。素晴らしい成長変化を期待せざるを得ません。

しかし、関西学院は学生たちのそうした成長変化をどこまでも期待しながら、同時にもう一つの世界にもしっかり目を注ぐように、と主張し続けてきました。新入生一人ひとり、これから実際に成長変化していく中で、そのこと自体を一步深いところから方向づけ、支えていく、といった何かより深い、一々の変化を超えた確かな変わらない世界にも、です。この点、私自身も実際に経験してきました。関学の中学部高等部で学び大学まで12年間在籍した私は、今またこうして母校で働いています。親もまた関学でしたので、実に実に長い間関学のどんどん飛躍的に成長変化していく様を目の当たりにしてきました。けれども、そうした著しい変化の中に在りながらも、その根底には決して変わるものがない確かなものが終始貫かれている、ということも繰り返し教えられてきました。日々の学部礼拝、春秋の合同礼拝、クリスマス、数々の宗教行事、そして何といても関学の教育全体の様ざまな機会に！このような教えは、もちろん私の経験を越えて、やがて120年目を迎える学院の長い成長変化歴史の中でも繰り返し語り続けられてきたものですし、もっとはっきり言えば人類の歴史的な進

歩変化の底に、人間のいわば「存在の深み」（ティリッヒ）に目を向けさせる真に深い教えでもあるのです。

例えば、神戸三田キャンパスの理工学部生には直接の問いでもあるのですが、現代は確かに科学や技術の驚異的な進歩のおかげで著しく成長変化し、素晴らしい繁栄と幸福を手に入れました。しかしまたその裏面には、ますます深刻な諸問題をも抱え込んでしまいました。自然環境の技術による改変はその因果的累積的結果としての破壊をもたらし、生命の科学技術による自由な操作は深刻な倫理問題を引き起こし、情報技術の進展は様ざまの情報倫理問題をもたらし、核利用の技術は・・・・・・、と枚挙にいとまがありません。科学的な知識や研究、技術はどんなに成果・成長・繁栄・変化をもたらしたとしても、はじめから方向を間違えると、取り返しのつかない結果を招いてしまうのです。知や技術の進歩・成果、それによる人間の生の変化・繁栄には、つねにそれを正しく方向づけ支えるしっかりとした考え・価値観とも言うべきもの、即ち成長変化のプロセスそれ自体を正しい方向に導く、より深いところからのつねに変わらない確実な支えが求められているのです。変わるもの・変わらなければならないものと、これを深みから正しく方向づける変わることのない確実な支えとのバランス、調和のとれた関係こそ、教え示されてきた内容なのです。

何も理系の分野だけのことではありません。むしろ大学の営み全体に問われている大切な問いではないでしょうか。冒頭で、新緑の季節と言いました。緑の木々に譬えて言うなら、つねに成長変化する美しい幹や枝葉や花を、地の中からそうした変化を支え続ける確かな根、それら両者のバランスのとれた関係といったようなものです。「あなたが根を支えているのではなく、根があなたを支えているのです」（ローマ11：18）。

関西学院の建学の精神はマスターリー・フォア・サーヴィスです。つまり、奉仕をするためにマスターするとはいっても、それは単に道徳的倫理的な理念ではありません。どこまでも、より深い宗教性に根ざした理念でありスピリットなのです。関学に入学して、これからいろいろ多くのことをマスターしていくわけですが、同時にそれを正しく方向づける一層深い視野をしっかりと身につけていただきたいと、心から願っています。

（理工学部宗教主事）

ランバスチャペル・ヌーンコンサート

西宮上ヶ原キャンパスのランバス記念礼拝堂では、学生音楽団体による恒例のミニコンサートが開かれます。お昼休みのひととき、どうぞ耳を傾けてみてください。

5月14日(月) 関西学院大学混声合唱団エゴラド

5月15日(火) 関西学院グリークラブ

5月22日(火) 関西学院大学交響楽団弦楽アンサンブル

5月24日(木) 関西学院大学交響楽団管楽アンサンブル

5月31日(木) 関西学院大学応援団総部吹奏楽部

6月 5日(火) 関西学院聖歌隊

6月11日(月) 関西学院大学ゴスペルクワイア "Power Of Voice"

6月12日(火) 関西学院ハンドベルクワイア

6月14日(木) 関西学院バロックアンサンブル

いずれも12時50分から13時20分まで、ランバス記念礼拝堂(上ヶ原)にて。

チャペル・オルガニスト募集

関西学院では毎年チャペル・オルガニストを募集しており、本年は5月23日にオーディションを行います。採用されますと個人レッスンを受けることができ、チャペルの奏楽をはじめ、発表会、研修会、コンサートなどを通して、教会音楽を中心とした幅広い知識、技能を身に付けることができます。

応募方法：「募集要項」「応募用紙」を吉岡記念館事務室宗教センターまたは神戸三田キャンパス事務室(号館キャンパス担当課)で受け取り、オーディションの予約を応募用紙提出時にさせていただきます。

「募集要項」「応募用紙」がダウンロードできます。

http://www.kwansei.ac.jp/c_christian/index.jsp

応募期間：5月1日(火)～22日(火)の事務室開室時間

お問い合わせ：吉岡記念館事務室宗教センター 0798-54-6018

ランバス・スプリングコンサート in 三田

マーク・アンダーソン パイプオルガンコンサート

と き：5月26日(土) 午前10時～11時30分

と ころ：ランバス記念礼拝堂(神戸三田キャンパス)

三田市民の方々にも広く開かれた演奏会です。(申し込み不要・入場無料)。

第172回ランバス演奏会

「マーク・アンダーソン パイプオルガン・コンサート」

と き：5月28日(月) 午後5時開演

と ころ：ランバス記念礼拝堂(西宮上ヶ原キャンパス)

<入場無料>

教職員・学生有志による日曜礼拝

授業期間中の第2第4日曜日に一部英語を用いるバイリンガル形式で礼拝が行われています。どなたでも参加できますのでどうぞお越しください。

大阪梅田キャンパスチャペルアワー

阪急梅田駅から徒歩すぐ、アプローズタワー14階の大阪梅田キャンパスでは、授業期間中の毎月第2水曜・第4金曜にチャペルアワーを開催しています。

5/25(金) 18:00～18:20 1405教室

6/13(水) 18:00～18:20 1405教室

6/22(金) 18:00～18:20 1405教室

【メッセージ】水曜日 樋口 進(宗教センター宗教主事)

金曜日 田淵 結(大学宗教主事)